

優秀映画鑑賞会推薦
日本映画ペンクラブ推薦

—— 伝統芸能の粹 ——

文楽に生きる

吉田玉男



作 品 名・シリーズ——伝統芸能の粹——
文楽に生きる「吉田玉男」
(35ミリ・カラー・36分)

企 画 製 作・財団法人ポーラ伝統文化振興財団

製 作 協 力・東宝映像株式会社

製作スタッフ・監 修・河竹登志夫
製作指導・高橋秀雄
プロデューサー・六鹿英雄、広川 恭
脚本・監督・木村正美

撮 影・住田 望 照 明・加藤純弘
録 音・膳師 豊 音 楽・園田芳伸
編 集・高松玄二郎 制作担当・池田雅行

協 力・文化庁文化財保護部、国立劇場、東京国立博物館
財団法人文楽協会、朝日座、早稲田大学演劇博物館



——曾根崎心中の見せ場。玉男が操る徳兵衛、切ない気持を軋いっばいみなぎらせ、お初と死の旅へ。観客を魅了する血の通った演技は、いったい、玉男のどこから出てくるのか。

玉男は14才の時に吉田玉次郎に入門した。師匠は今と違って人形の遣い方を何ひとつ教えてはくれなかった。苦労を重ねてやっと舞台に立つ最初の仕事は足遣いだが、体が思うように動かず、師匠から主遣いの履く巨大な下駄で思い切り蹴られたという。厳しい修業時代ではあったが、大勢の人に支えられ励まされ、今日まで歩んできた玉男が、若い弟子に稽古をつける時に言うことは技術的なものばかりではない。「人間は1人では生きられない。いろいろな人に支えられ、そして自分の選んだ道を大切に辛棒強くコツコツとやっていけば、きっと腹の底から仕事の楽しさを味わう事ができるようになる」と。

初世吉田玉男・年譜

大正8年1月7日生 本名・上田末一

昭和8年(14才)吉田玉次郎に入門。吉田玉男を名乗る。

昭和9年「和田谷戦女舞鶴」の綱若で初役を勤める。師匠(玉次郎)の厳しい薫陶のもとに修業を重ね、初世吉田榮三、三世吉田玉助、二世吉田玉市など先輩の指導を受けながら、次第に芸に磨きをかけていった。

昭和18年(24才)の時に玉助の代理でいい役を勤めたり、昭和23年(29才)の時にも、主遣いで代役を勤めたりする機会にめぐりあったりはしたが、名実ともに念願の主遣いとして舞台に立ったのは、昭和30年(36才)の時「曾根崎心中」で、二世吉田榮三の遣うお初に対して徳兵衛を遣ったのが最初である。以来、近松ものの二枚目役として源太、若男をよく遣い、その地位は確立していった。

昭和39年(45才)の時「妹背山婦女庭訓」で大阪府民劇場奨励賞。

昭和40年(46才)「心中宵庚申」の演技で大阪文化祭賞。次いで、昭和41年(47才)「源平布引滝」で大阪府民劇場奨励賞と十三夜会年間大賞とたて続けに受賞した。

品格のある端正な芸に加えて、役柄を内面的に表現する肚のある芸境を身につけてからは、文七、孔明、検非違使など芸域の中が広がり、昭和52年4月に重要無形文化財保持者に認定された。人形遣いでは、二世桐竹紋十郎に続いて2人目である。



人形浄瑠璃文楽人形について

人形浄瑠璃は、義太夫節に合わせて人形を遣う一種の楽劇である。その発生は慶長以前にさかのぼるが、演劇的な形態をほぼ整えたのは寛永の頃で、その後洗練を重ねて今日に至っている。

浄瑠璃と三味線が劇の起伏、進行、登場者の心理を描き、人形はその浄瑠璃を視覚化して見せるもの。この三者が一つになって、いわゆる三味一体となると、はじめて人形浄瑠璃の芸術となる。

人形は、一つの人形を主遣い、左遣い、足遣いの三人で遣うという、世界の人形芝居に類を見ない独特なもので、高度の芸術的価値を持つ。演技・演出の様式など、わが国演劇史上に残した足跡は大きい。

Pola Foundation for the Promotion of Traditional Japanese Culture

財団法人ポラ伝統文化振興財団

〒141-0031 東京都品川区西五反田2-2-10 ポーラ第2五反田ビル2階
TEL.03-3494-7653 FAX.03-3494-7597